

巻頭言

急がず、焦らず、耐えていく

令和になってから利用してくれた子どもたちは12人でした。現在、久々に18歳の子が入所しています。施設運営の厳しさは相変わらずなのですが、スタッフも新しくなり気を引き締めて安定的運営を目指し頑張っております。今後とも、ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

さて、新型コロナウイルスをめぐっては、たくさんの専門家や評論家がいろんなことを論じておりました。それにしても、最大の予防策が、手を洗うことと人から離れること、この二つなんですね。科学が進歩して何もかもが難しくなっているように見える現代、そのシンプルさに感動します。同じように、ウィルスは打倒、撲滅の対象ではなく、共存、共生していかななくてはならない仲間なのだという視点も新鮮でした。「文明は感染症のゆりかご」だということです。(山本太郎教授・長崎大熱帯医学研究所)

一方、どうも私たちは、「とにかく早く、わかりたい」、「自分の考えが正しいと思いたい」という傾向が強いですね。そのため、過激な意見に踊らされ、デマの拡散に加担してしまうといった愚かなことを繰り返してきたのが人間の歴史でした。しかし、世の中には、そう簡単にわからないことも多いのです。そもそも深遠な問題はすぐに分かるはずがない。分かったつもりにならず、この分からないという状況に耐え、悩む力こそが大切である……と、作家で精神科医の帯木蓬生さんが新聞のインタビューで語っていました。「手頃な答えに飛びつかず、分からなさ、不思議さに耐え、中ぶらりんな状態に踏みとどまる能力。それによって知性が研ぎ澄まされる。」ということです。ウーム、これは実に奥が深い。子どものことを考え、子どもと向き合うときにも参考になります。「性急に事実や理由を求めずに、不可思議さや疑念を持ち続けることによって、人と人の生身の対話が可能になる。」のです。それをやさしくいうと、「急がず、焦らず、耐えていく」……この「耐えていく」というのが「肝」、「子育ての神髄」です。そうすれば、どんな子どもでもちゃんと育っていくんです。きっと……。こんな時代だからこそ、しっかり耐えて見守りましょう。



子どもシェルターレラピリカ
理事長

内田 信也



児童養護に対する想い～先人にきく～第3回 秦直樹先生

事務局長 中島圭太郎

皆様、事務局長の中島です。少しお休みをいただいております「児童養護に対する想い」の第3回をお届けします。今回お話を伺ったのは、当法人の理事をしていただいている興正学園の施設長の秦直樹先生です。秦先生といえば、アイデアマンとかアグレッシブなイメージが強いのですが、そのスタンスがどこから来るのかを伺って来ました。

な) 秦先生は、興正学園の施設長で社会福祉士の資格もお持ちですが、社会人になる前から児童養護に関わろうと考えていらっしゃったのですか？

は) そうではないんですよ。僕は施設の園長の息子でもありますし、僕の実家はお寺で、僕自身も浄土真宗のお坊さんでもあるわけです。小さい時から、寺の方は継ぐことになるんだろうなとは思っていたんですが、こっち(児童養護)の方は手伝うつもりなんてこれっぽっちもなかったんです。むしろ、どちらかといえば、距離を置こう、近づかないようにしようと思っていたぐらいですから。大学も仏教系の大学に進みましたし。

僕の実家は、今も豊平区の中の島にある晟徳寺というお寺ですが、昔はその隣に興正学園の施設があって、両親がそこで働いていたわけです。だから、小さい時には、一人で家で留守番するというよりは、施設の方に遊びにいったり、施設の子どもたちと一緒に遊んでいたんです。施設の職員と一緒に育ててもらっていたというんでしょうかね。施設の職員には、やんちゃをして怒られてということを繰り返していました。一緒にいる中で施設の子どもが背負っているものをだんだんと知るようになって、自分みたいな者が施設の職員をやれるわけなんてない、むしろこの仕事に近づいてはいけないというように思い出したのです。

中学2年のときに、興正学園が中の島から新琴似に移転しましてね、そのときも両親は興正学園で働いていたわけですが、さっきも言ったように、あえて近づかないようにしていたんです。だから大学も仏教系の大学に進みましたし、就職を前にした時期にも、親父から興正学園を見に来て、職員の仕事をみてみると何度も言われた時も、自分は施設で指導を受けて育ったんだから、

そんなの見に行かなくて大体想像はつく、という話をしていたわけです。

な) なるほど、大学を卒業するまでは、児童養護に関わるつもりはこれっぽっちもなかったわけなんですね。では、どうして児童養護の世界に進むことになったわけでしょう？

は) 親父からしつこく興正学園を見にきてみると言われたので、大学を卒業する直前に、興正学園に来て仕事をみたわけなんです。そうするとね、施設の子どもたちの生き生きした顔とか、のびのびした様子が見られず、どちらかという大人の顔をうかがって生活をしているのを見て、「ん～こんな職員さんたちが子どもたちを支えるよりは、自分が支えた方がいいのかな」と思ったのが、自分が児童養護に目を向けるひとつのきっかけでした。この時代は、大人と子どもの関係が、適切な関係ではなかった。僕が施設で育ってきた時代も同じような状況があって、暴力であるとか、力による大人の子どもに対する支配とか、集団の画一化とか、そういうのがとても気になりました。自分がここに来て子どもたちを支えた方が今よりなんとかなるかな、と思ったのがスタートでした。

その当時の職員さんって、自分が子どもの頃にやんちゃして怒られて、お世話になった職員さんたちだったわけです。7年ぶりに興正学園に戻ってきてみたら、自分が子どもの頃経験したものと同じような力の支配とか恐怖とかがあって、これは子どもたちは生きにくいだろうな、これを変えるのは自分の責任かなと思いました。

もう一度大学に入り直して、社会福祉士の資格をとりました。

な) そうすると、興正学園に入られた当初は、前からの職員とぶつかるということも多々あったんだと思います。

は) それはぶつかりましたね～。

この記事の続きは、ブログ(<http://www.rera-pirka.jp/blog/>)で。





コタン奮闘記

弁護士 栗田みち子

昨年冬、私は初めて「コタン」を務めることになりました。それまでは、月1回程度夜間ボランティアとして入居者さんと接してきましたが、入居者さんからすれば、月1回程度来る夜間ボランティアは「たまに会う人」か、「今日会ったがもう二度と会わない人」です。コタンとなると、より深く長く接することになりますから、子どもと信頼関係を築くことができるだろうか、どういう雰囲気ですらよいのだろうか、というのが一番不安な点でした。

私がコタンを務めた子ども、仮に「Aさん」とお呼びしますが、Aさんとは、私がコタンに就く前から夜間ボランティアとして接していました。ですので、私は「接し方を切り替えるべきか……いや、いきなり切り替えるのもおかしいか……」と悩みながらコタンとしての初回面談に臨みました。

すると、Aさんはいつもと少し違って緊張した様子で、自分の気持ちを率直に話してくれましたし、私の話も真剣に聞いてくれました。私がうだうだ悩んでいる間に、Aさんの方が先に「コタンと向き合う」という気持ちを強く持ってしてくれたのでした。また、Aさんは自分の意図を口で上手く伝えるのが得意でなかったため、ノートに日々の出来事やそのときの気持ちを書いて私に渡してくれました。私はそのノートに返事を書いてAさんに返し、2人で交換日記をしました。Aさんのおかげで、徐々にですがAさんとの信頼関係ができていったように思います。

私とAさんは、今後のAさんの人生について、長い期間・短い期間それぞれで人生設計プランを考えてみることにしました。Aさんは、期待をかけてもらったり、自分の希望が叶ったりといった経験が少なく、「諦め」が得意になってしまっていました。また、私がAさんのコタンに就いたとき、Aさんに残された道は既に一つに絞られかけており、Aさんが希望しない方向にしか向かっていませんでしたので、Aさんは「諦め」の覚悟をしていまし

た。Aさんは「結局希望は通らないだろうし、期待しても仕方がない」という様子で、自分の人生についても特に考えたことがないと言っていました。

そこで、私はまずAさんの希望が叶うように頑張るという宣言をしました。また、Aさんとの間の合言葉として「リカバリー」を掲げました。人生は案外長いので一度失敗してもいつでも巻き返しを図れるし、むしろ失敗することはとても良い経験になるんじゃないか、という話をし、数十年後どうなりたいか、そのために今後数年間で何をしたいか考えました。その中で、Aさんは「ふつうの高校生」の生活をしたいと話してくれました。高卒資格も欲しいけれど、それ以上に、高校生として友達を作ったり学校行事に参加したりしたいというのがAさんの希望でした。

当初は高校受験が難しい状況でしたが、様々な方の助けを借りることができ、Aさんは無事高校を受験できるようになりました。Aさんは面接試験に向けて何度も練習し、自分の将来の夢や学校でやりたいことなどを整理して話せるようになっていきました。

Aさんは受験直前に「のんの」を出すことになりました。退居にあたり、私はAさんに合格祈願のお守りと定期入れを贈り、定期入れがボロボロになるまで高校に通うよう期待しているし、もし受験に落ちたり入学後に高校をやめることとなったとしても「リカバリー」で就職して通勤でボロボロにすれば良いというような話をしました。Aさんは少し嬉しそうに「プレッシャーだ」と言い、自分が期待されていることを受け止めてくれたようでした。

結果として、Aさんは見事高校に合格し、この春から高校に通い始めました。この度の新型コロナウイルスの影響で高校への通学は数回しか経験していませんが、定期入れを使ってくれているそうです。将来、ボロボロになった定期入れを見せてもらうのが楽しみです。



スタッフ通信

レラピリカ「のんの」にスタッフとして関わる事になり10か月になります。

それまで私は、大阪で学童保育の指導員を20年以上してきました。学童保育と言えば小学生が相手です。それも1～3年生、ギャングエイジの子どもたちですから、思春期のそれも女子で、その上複雑な生い立ちをしてきた子たちに関わる事は初めてだったので、不安がなかったわけではありません。しかし子どもの社会問題に興味があり、このような場所の必要性は常々思っていたので、「やってみたい」「かかわってみたい」と思い、自分の年齢の事など全く考えずに飛び込みました。

しかし1ヶ月経った頃から私は悩んでいました。私を全く受け入れてくれない子がいたのです。やっぱり無理だったのか、向き不向きがあるのではないかと、自分でいいのだろうか、一時は胃に穴があくか、円形脱毛症になるか、どちらかだなと思った時期もありました。しかしそんな私にある弁護士が「いろいろな人がいていいのです。ここの子たちも社会に出たら色々な人に関わらなきゃならないのですから」と言ってくれました。その言葉がすとんと私の中に落ちました。天才バカボンのお父さんの言葉では

ないですが「それでいいのだ」「私はあなたの敵ではないよ」と心で呟きながら彼女に関わってきました。

ここに来て何人の子に出会ったでしょうか。その子たちと何気ないお喋りをしていると普通の子たちに思えます。辛かったことを泣きながら話してくれた子もいます。聞くことしかできない私も一緒に泣いていました。そして「よくここまできたね。ありがとう。」というのが精一杯でした。また、さらりと家を出たときのことをいう子もいました。

ここは疲れた心と身体を休める場所、次の飛躍への力を蓄える場所。大人も生きるのが大変な時代です。大人ですらそうなのに子どもたちは尚更です。特に女子、女性は時代や民族、宗教が変わってもまだまだ生きにくい世の中です。「子どもたち、声を上げれば、手を伸ばせば、必ず力になってくれる人はいるからね。だから、大丈夫、がんばって。」次の場所へとドアを開けていく子にエールを送ります。そして私は子どもたちの為に少しでも寄り添いたいと思います。まだまだ途上のスタッフですが、よろしくをお願いします。





ホームページをリニューアルしました

副理事長 朝倉 靖

我々はこのたび、NPO法人レラピリカのホームページのリニューアルを行いました。以前のホームページは、7年前の法人設立に伴って作ったものですが、あまり時間をかける余裕がなく、後から見直すと必ずしも十分なものとはいえませんでした(例えば、スマートフォンへの最適化もできていませんでした)。

子どもシェルターが役割を果たすには、何よりも困っているお友達にその存在を知ってもらうことが大前提になります。また、お友達たち本人だけではなく、その周りにいる大人の方々に広く知っていただくことも大切です。大人の方々から、困っているお友達に対して、子どもシェルターに助けを求めているかどうかとアドバイスしてもらうことで、お友達とレラピリカがつながることができるのです。我々は、常々、もっともっと子どもシェルターを必要としているお友達がいるはずだ、我々の存在をわかりやすく社会に広報しなければならぬ、と考えていました。そして、子どもシェルターの存在や、その役割を知っていただくための重要なツールがホームページです。我々は何よりも「わかりやすいホームページ」を目指して、リニューアルに取り組みました。

過去のメールのやり取りなどを振り返ってみると、ホームページのリニューアルの議論を始めたのは、2019年1月にまで遡ります。我々レラピリカには、テーマ・分野ごとに「班」があります。ホームページのリニューアルを担当したのは「広報班」です。立場上、私朝倉が一応責任者ですが、お恥ずかしながら、著しくIT文化に疎いため、せいぜい会議の日程調整をしたり、プリント外れの意見をときどき述べるくらいで、ほとんど役に立ちませんでした。実質的には、中島圭太郎弁護士、栗田みち子弁護士、小林直毅弁護士、平野美里弁護士が中心となって、頑張ってくれました(本当にありがとうございました!)

最初はイメージ作りから始めました。ほかの子どもシェルターのホームページをはじめとして、いろいろな組織・団体のホームページを手分けしてチェックし、イメージを膨らませていきました。掲載する内容については、「そもそも子どもシェルターって何」、「シェルター(施設名「のんの」)での一日の生活はどんな感じ」、「困ったときにまずどう

やって連絡をすればいいの」といったことなどなどについて、一からその内容を作り上げていきました。まず、担当者を決めて原稿を書いてもらい、その内容を広報班のメンバーが集まって議論するといった形で、内容を詰めていきました。

製作を委託している業者さんとの打ち合わせも繰り返し行いました。少しでも良いものにしたいという思いのもと、掲載する文章の内容はもとより、色合いや、改行位置までかなり細かく意見を出し合って決めていきました。特に、業者さんとのやり取りでは、チェックポイントや、反映済の点、反映未了の点など、栗田さんが一覧表を作成するなどして、かなり細かく分析してくれました。本当に大変な作業だったと思います。栗田さんの頑張りなくしてホームページのリニューアルはできませんでした。

わかりやすさ、使いやすさという意味では、メールによる相談を可能にしたり、寄付や入会のフォームも作成しております(実際すでにメールでの相談をいただきました)。正直なところ、途中、なかなかゴールが見えずにめげそうになった時期もありましたが、「子どもシェルターのことをわかりやすく伝えたい」という広報班のメンバーの熱意に支えられ、このたび何とか完成に至りました。百聞は一見にしかず。皆様、ぜひリニューアルしたホームページをご覧ください(<http://www.rera-pirka.jp/>)。



子どもシェルター
特定非営利活動法人 **レラピリカ**

子どもたちの翼を休める場所

行き場のない子どもたちに翼を休めるとまら木を

レラピリカについて

当法人のご紹介。レラピリカを知りたい方はこちら

子どもシェルターについて

子どもシェルターに入りたい方はこちら

子どもを支える大人の方へ

ニュースレター
レラピリカの日常や



入居者さんのギャラリー

入居者さんがイラストを描いてくれました。とても素敵なイラストなのでニュースレターで紹介させていただきます。ぜひご鑑賞ください。

〈作者より〉

縁あって、のんで生活する事になりました。

最初は「施設」というところが嫌で嫌で仕方がなかったですが、実際にのんで生活してみて、スタッフの皆さんも優しく、弁護士の皆さんとも関わることができ、楽しく過ごしています。私は絵が好きなので、生活の中の気晴らしで、絵を描いています。レラピリカのキャラクターを考え、それぞれキャラクターに名前を付ける事にしました。パンダは、開所当時ののんにいた大きなパンダのぬいぐるみの名前をとって『はなちゃん』。猫は、北海道ならではの「雪」とののんの意味である「花」をあわせて『雪花(せつか)』。鳥は、何度か会った理事長からとって『りじっち』です。今回ニュースレターに載せてもらうことになり、とても嬉しく思っています。



入会・寄付のお願い

子どもシェルターの運営には子どもたちの生活費やスタッフの person 費などで年間1500万円以上の資金が必要です。しかし、行政から支給される公費だけでは不十分で、皆さまからのご寄付を必要としています。皆さまからの温かいご支援をお待ちしております。

■会員として継続的にご支援をいただける場合

レラピリカでは、私たちの活動理念に賛同して入会していただける方を募集しております。

入会を希望される方は、「入会希望」と明記のうえ、希望する会員の種別、住所、氏名、電話番号をFAXまたは郵便でレラピリカまでお知らせください。レラピリカより入会申込書をお送りします。

なお、入会された方には、レラピリカの活動報告やニュースレター、イベント案内などを継続的にお送りします。

■会員の種類

【正会員】 総会で運営方針などについてご意見をいただく会員(個人のみ)

【賛助会員】 資金面で援助していただく会員(個人、団体)

■年会費 ※会員からのお申出がない限り、毎年自動更新となります。

【正会員】 5万円(別途入会金10万円)

【賛助会員】 個人/一口5,000円、団体/一口1万円

■会員にならずご寄付のみいただける場合

匿名での寄付も承っておりますが、可能でしたら、お振込後に住所、氏名、電話番号をFAXまたは郵便でレラピリカまでお知らせください。レラピリカよりニュースレターをお送りいたします。

連絡先

〒060-0042 札幌市中央区大通西12丁目
北海道高等学校教職員センター 5階 北海道合同法律事務所内
電話：011-272-3125 FAX：011-272-3126

寄付及び 会費等の振込先

北洋銀行札幌西支店：普通5170871

特定非営利活動法人 子どもシェルターレラピリカ 理事長 内田信也

郵便振替口座：加入者名 特定非営利活動法人 子どもシェルターレラピリカ
口座記号027109 口座番号101160

ご寄付をいただきました

ご寄付をいただいた皆様に、心より御礼を申し上げます。

ニュースレター第12号にてご紹介させていただいた以降、新たにご支援を頂戴いたしました企業様・団体様をご紹介申し上げます。(敬称略 2020年5月31日まで)

コストコホールセールジャパン
北海道信金ひまわり財団
社会福祉法人北海道共同募金会
一般社団法人北海道CGCみどりところの基金
東京海上日動share happiness倶楽部



羽ばたくための 準備をしていきましょう

広い北の大地を
風のように
自由に駆け抜けて
欲しい

●レラピリカに込めた願い

レラピリカとは、アイヌ語で「美しい風」という意味です。
居場所のない子どもたちが、子どもシェルターで生活する間に
少しでも生きる力を蓄え、
子どもシェルターを巣立って行った後は
広い北の大地を風のように自由に駆け抜けて欲しい、
そのような願いが込められています。

1 声を聞かせて!

詳しい事情をお聞きして、どのような支援ができるか検討します。
入所できるのは原則20歳未満の女子で、入所する際は基本的な約束ごとを理解していただきます。
子どもと面談して、入所の意思を確認します。
入所が難しい場合でも、相談にのったり助言をしたりすることもできます。他の専門機関への橋渡しをすることができる場合もあります。

2 翼が疲れたら…

居場所のない子どもや相談を受けた大人・機関は、レラピリカに電話してください。

電話番号

011-272-3125

3 ようこそ、レラピリカへ!

次の生活の場所が見つかったら、レラピリカは卒業です（利用期間は2週間から2か月くらいを目安としています）。
卒業した後も、困ったことや悩みごとがあればいつでも子ども担当弁護士に相談してください。

利用料（食費や宿泊費など）は無料です。
ゆっくり休んで、自立に向けて羽ばたくための力を蓄えましょう。
子ども一人ひとりに子ども担当弁護士がつき、法的な支援や親権者などとの交渉を行います。
家庭への復帰、一人暮らし、住み込み就労、自立援助ホームなど、次の生活の場所を一緒に探します。

4 そして、大空へ…

卒業後も
困ったことや
悩み事があれば
いつでも
相談できます

特定非営利活動法人 子どもシェルター レラピリカ

〒060-0042

札幌市中央区大通西12丁目北海道高等学校教職員センター5階

北海道合同法律事務所内

電話:011-272-3125 FAX:011-272-3126

ホームページアドレス <http://rera-pirka.jp/>

子どもシェルター
レラピリカ

NEWSLETTER

ニュースレター

NO. 13